令和７年度　学校図書館活用推進事業　実践報告

―多くの本に触れ、楽しんで本を読む子どもを育てるー

新潟市立西特別支援学校

１　西特別支援学校の児童生徒の様子

（１）読書センターとして

・小学部、中学部ともに「図書（読み聞かせ）の時間」が定着しており、読み聞かせを落ち着いて聞くことができる。
・小学部ではボランティアによる読み聞かせも日ごろから行われており、本が児童生徒にとって身近である。
・好きな本を選び、じっくりと読書を楽しむことができる児童生徒がいる。
・下校時のバスやお迎えの待ち時間などに本を楽しむ姿が見られる。
・好きな本やジャンルが固定しがちで、新しい本に興味を示さない児童生徒が多い。
・図書館が３階にあり、移動に時間がかかるため、日常的に図書館を利用することが困難。

（２）学習・情報センターとして

・中学部では学習端末から検索を行う練習をし、必要な資料を自分で見つけることができる生徒もいる。
・児童生徒によっては自分の興味があることを、図鑑で調べることができる。
・情報を見つけ出す力に個人差が大きい。

以上のことから本を使った学習の基礎となる読書に児童生徒がさらに深く親しむことができるよう「読書センター」「学習センター」としての機能の充実を課題とした。

２　今年度の取組

今年度は児童生徒、教職員がさらに本を使いやすい環境を考え、「読書センター」「学習センター」としての様々な機能のうち、「児童生徒と本をつなぐ」「児童生徒と学習をつなぐ」機能の充実を目指して取り組んだ。

この活動を通して、特別支援学校だからこそ力を発揮できる、より様々な「個性」や「楽しみ」に寄り添った図書館づくり、広義の読書活動としての教科学習とのつながり、「今の楽しみ」「余暇の楽しみ」「将来の楽しみ」となる読書活動のきっかけづくりと強化を意識し、学校を卒業してからの読書活動へつなげられるよう、公共図書館とのつながりを深める活動を行った。

３　具体的な取組

（１）児童生徒、教職員が利用しやすい「にしとく電子図書館」を作成

※著作権法第 37 条３項に則って行う。

絵本の画像を電子化し読み聞かせ音声をつけた読み聞かせ動画をロイロノートで作成し、児童生徒、教職員が使える「にしとく電子図書館」として整備。

特別支援学校では絵本の破損が多く、それを気にして絵本を学習で使いにくいという声があったことから、採択教科書とされている絵本の電子化も積極的に行った。

児童生徒が自分のタブレットで動画を学習や余暇時間に見る他、教職員がＴＶ画面に映して授業の導入を行うなど絵本を使いやすくなった。

・授業実践　小学部１年「おはなしあそびをしよう」　　実践者　大橋和代

学年・児童生徒数	小学部１年生 １０名	教科 活動	遊びの指導	指導時期	令和７年６月 （全１３時間）
題材名	「お話遊びをしよう」				
ねらい	・いろいろな絵本のお話に興味をもち、話を聞いたり、関連する遊びを友達としたりして、遊ぶことができる。				

使用図書

・『うらしまたろう』いもとようこ／文・絵　岩崎書店・『ばけばけばけばけばけばけたくん』岩田明子／文・絵　大日本図書・『とこやにいったライオン』サトシン／作　教育画劇・『おおきなかぶ』A.トルストイ再話　福音館書店・『ノラネコぐんだんパンこうじょう』工藤ノリコ／著　白泉社・『ケーキやけました』彦坂有紀／作　講談社・『もりのおふろ』西村敏夫／作　福音館書店

活動の様子

①　『にしとく電子図書館』の音声動画化された絵本をテレビ画面に映し、読み聞かせを聞く。
②　絵本の登場人物になったつもりでお話に関連した遊びを楽しむ。
毎時間、上記の流れで遊びの指導の学習を行った。

うらしまたろう
・衣装を着て亀に乗る。
・魚釣り

ばけばけばけばけばけばけたくん
・クレヨンでばけたくんを変身させる。

とこやにいったライオン
・クレヨンでライオンの髪型を描く。

おおきなかぶ
・大きなかぶを抜く。
・野菜探し
・お料理ごっこ

ノラネコぐんだんパンこうじょう
・粘土でパン作り

ケーキやけました
・粘土でケーキ作り

もりのおふろ
・ボールプールやローリングシーソーでお風呂ごっこ

成果	課題
・『にしとく電子図書館』の蔵書を大きな画面に映したことで集中してお話を聞いたり、表情やしぐさで表現したりして読み聞かせを楽しむことができた。 ・読み聞かせを聞いた後に、絵本のお話に関連した遊びを行うことで、登場人物になったつもりで見立て遊びを楽しむ姿が見られた。	・好きなジャンルが固定しがちで、新しい本に興味を示さない児童が多い。今後も様々な絵本の読み聞かせやお話に関する遊びを楽しむ機会を作り、児童の興味関心を広げ、「今の楽しみ」「余暇の楽しみ」「将来の楽しみ」となる読書活動のきっかけづくりを行っていきたい。

（２）生涯読書へつながる読書活動のきっかけ作り

当校では本が好きな児童生徒が多く、余暇や心を落ち着けるために本を見る子も少なくはない。学校を卒業しても本を読む手立てが身近にある環境が続くことが望ましい。家庭で本を購入する他に、公共図書館があることを知り、使うことができるという選択肢をもってほしいという思いから、公共図書館との連携を深め「将来の楽しみ」へつなげる活動を行った。

・貸出方法の変更

当校では今まで自分のことは自分で行う「自立」に重きを置き、職員のもと、自分でバーコードリーダーを使い本の貸出・返却を行っていた。今年度からは、生涯読書を考え公共図書館との違いを減らすために、司書による貸出・返却の方法へ変更した。「借ります」「返します」を伝え、対人を意識して図書館を利用した。

公共図書館に行ったことがない児童生徒がいる可能性を考え、希望学年にはオリエンテーションの際に「公共図書館」についての説明も行った。

・読書旬間　西川図書館司書によるおはなし会

読書旬間に西川図書館の司書によるおはなし会を毎年行っている。手遊びも交えながらのおはなし会は児童生徒が楽しみにしているイベントで、公共図書館を身近に感じるきっかけにもなっている。

・授業実践　小学部４年「図書館へ行こう」　　実践者　井塚加奈

学年 児童生徒数	小学部４年生 １１名	教科 活動	生活単元学習	指導時期	令和７年６月 （全９時間）
題材名	「図書館へ行こう」				
ねらい	・図書館利用の仕方やマナーを知り、本を選んだり、順番を守って本を借りたりすることができる。				
使用した図書					
・『おめんです２』いしかわこうじ／作・絵　偕成社・『ばけばけばけばけばけたくん』岩田明子／文・絵　大日本図書・『だいすきなほんくん』クリスティン・オコンネル・ジョージ／文　評論社・『いろいろバス』tupera tupera／作　大日本図書 ・『このあかいえほんをひらいたら』ジェシー・クラウスマイヤー／文　講談社・『パパ、お月さまとっ					

て！』エリック＝カール　偕成社・『てるてるぼうず』おぐまこうじ／作　くもん出版

活動の様子

①　「図書館の約束を知ろう」　５時間

・毎日、手遊び→約束の確認→借りる練習→読み聞かせの順番で行った。
・教室を西川図書館に見立て、学校の司書に西川図書館の職員になってもらい、借りる練習をした。
・西川図書館のカードのダミーを１人ずつ作成し、バーコードを読み取る機械も再現し、本番同様に借りる練習をした。

げつ	か	すい	もく	きん
6/16 うんどうかいをしよう	6/17 てあそび オリエンテーション どうが	6/18 てあそび よみきかせ	6/19 てあそび かりるれんしゅう よみきかせ	6/20 てあそび かりるれんしゅう よみきかせ
6/23 てあそび かりるれんしゅう よみきかせ	6/24 よみきかせ かりるれんしゅう [としょかん]	6/25 よみきかせ かりるれんしゅう [としょかん]	6/26 こうかいけんくしゅう	6/27 てあそび ふりかえり てがみづくり

②　「図書館へ行こう」　４時間

・学校の図書室を西川図書館に見立て、借りる練習をした。いつもの図書室にならないように、キャラクターの本や音の鳴る本は除き、西川図書館のダミーカードで借りる練習をした。読み聞かせもデジタルではなく、本を見せることとした。
・校外学習で西川図書館へ行き、実際に借りた。
・最終日には、振り返りをした後、感謝の手紙を作成した。

成果	課題
・図書カードのダミーを作ったり、ゲストとして学校の司書に西川図書館の職員をしてもらったりすることで、最後まで興味・やる気をもって活動することができた。 ・中学生が職場体験で来ていたため、交流することができた。（読み聞かせ） ・授業で西川図書館を利用することで、休日や長期休業中に保護者と一緒に利用するようになった。（余暇活動へと繋がった。）	・学校ではカードにバーコードリーダーをかざしたときに「ピッ」と音が鳴るようにしていたのだが、西川図書館では、ダミーのカードだったため、音を鳴らすことができなかった。職員の方が口で「ピッ」と言ってくれたのだが、いつもと違うことに納得できず、気持ちが崩れてしまった児童がいた。もっと綿密に打ち合わせをするべきだった。 ・借りたり、読んだりする時間を長めに設定していたが、最後には飽きていたため、もう少し短く設定してもよかった。

（３）児童生徒の使いやすさを考え、バリアフリーでアクセシブルな図書館を目指す

・１階図書コーナーの充実

当校図書館は３階に位置し、移動に時間がかかる児童生徒にとっては気軽に来られない場所である。全校児童生徒が、使いやすい環境を作るため、令和３年度に整備した１階図書コーナーに今年度書架を増やし、さらに多くの本を楽しめるようにした。

１階図書コーナーの本はその場で読むことができる他、教室へ借りていくことができ、常に多くの本が借りられている状態である。今年度本が増えたことで「お気に入りの本が図書コーナーで読めるようになって児童がとても喜んでいる」という声があった。

↑令和３年　新設時の様子。この頃は270冊ほどの本が並んでいた。

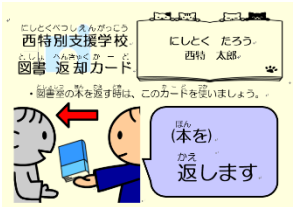
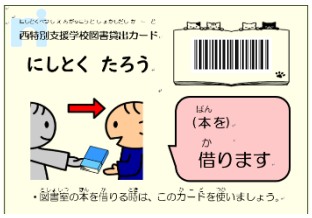
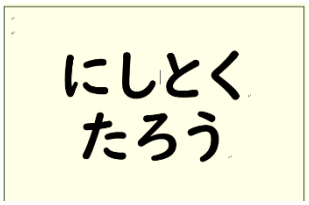
↑１段書架を増設した。現在760冊以上の本が並び、多くの児童生徒が利用している。

・貸出カードのレイアウト変更

貸出カードは図書館内に保管されており、自分のカードを自分で見つけ本を借りる、という方法で貸出を行っている。

以前の貸出カードは情報量が多く、自分の名前を見つけるのが難しい児童生徒が見られたため今年度レイアウトを変更した。一面すべてを氏名にし、見やすい・見つけやすいことを心掛けた。

結果、児童生徒が自分の名前を見つけるのがスムーズになり、職員からも「見やすくなり、支援しやすい」という声が多く聞かれた。

変更前	変更後	
表 裏  	  	どちらの面も名前を大きく表示した。 今までの裏面には「本を返します」の意思表示があったが返却時にカードは使わないため、全面氏名に変更した。館内では名前の面を表にして見えるように保管している。

・移動図書館の実施

１階には図書コーナーがあり、３階には図書館があるが２階には本を楽しめる場所がないことから、読書旬間中にブックトラックを廊下に設置し「移動図書館」とした。

１台に９０冊排架し、小学部向け、中学部向け、計２台設置した。ブックトラックから教室に借りていき、楽しんでいる様子があった。

教室移動の際、本が気になってしまわないよう目隠しをして設置した。特に中学部の利用が多かった。→

（４）児童生徒がさらに深く読書に親しむことができる活動

・読書旬間の実施

昨年度から読書週間から旬間（２週間）となり、全学年がより深く読書に親しむ期間になっている。今年度は「にしとく電子図書館」が教室での読書活動につながった他、級外職員からの読み聞かせも充実したものになった。

① 児童生徒によるおすすめの本の紹介

児童生徒のおすすめの本を玄関ホールに掲示した。本は図書館でおすすめの本として展示し、借りられるようにした。

図書館

玄関ホール

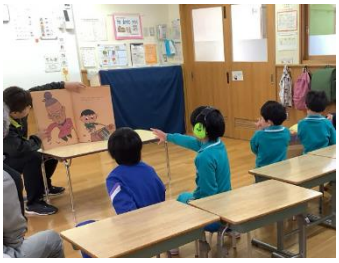
紹介は読んだ時の気持ちに丸をつけるテンプレートを用意し、なるべく負担を感じずに書けるものにした。
紹介文が書ける児童生徒は実態に合った様式に変更して記入した。→

② 読書タイム

教室での読書タイムを作り、読み聞かせか読書の時間をそれぞれのクラスの実態に合わせて行った。読み聞かせは、担任による読み聞かせ、「にしとく電子図書館」を利用、「マルチメディアデイジー」を利用の中から選択して行った。「にしとく電子図書館」はアンケート回答の６６％が利用したとのことだった。

③ 級外職員による読み聞かせ

昨年度までは限られた学年を対象としていたが、今年度は全学年を対象として行った。校長、教頭、教務主任からの読み聞かせはどの学年でも大変盛り上がり、担任や司書とは違う教員からの読み聞かせに、児童生徒はとても楽しんでいる様子だった。



④ おはなし給食

毎年恒例となっていて、楽しみにしている児童生徒も多い。対象の給食の日はランチルーム入り口に栄養教諭の協力のもと、おはなし給食の献立が出てくる絵本のページなどが紹介されたり、校内放送で絵本と献立の紹介をしたりするなど、児童生徒の興味の広がりにつなげている。

⑤ 教員のおすすめの本の紹介

１階図書コーナー壁面におすすめの本を持った教員の写真を掲示し、一緒に本も展示した。

普段は同じ本を好む児童が、「おすすめの本の中から興味のあるものを見つけ手に取った」という声も聞かれ、児童生徒の興味の幅が広がるきっかけとなっている。

⑥ 司書によるパネルシアター

普段は絵本の読み聞かせが主だが、経験豊富な教員から司書が手ほどきを受け、読書旬間のお楽しみ企画としてパネルシアターを行った。授業時数の関係で中学部のみの実施になったが、普段の読み聞かせとは違った時間となり、一緒に歌ったり声を出したりと、幅広い生徒が楽しんでいる様子だった。

⑦ 西川図書館司書による読み聞かせ　（１）参照

⑧ 移動図書館　（２）参照

３　成果と課題

（１）　成果

・「にしとく電子図書館」を整備し、児童生徒だけではなく教職員も絵本を使いやすくなった。また読書バリアフリーにもつながった。「としょかんだより」で保護者に周知し、家庭での読書時間にも活用可能となった。

・一人読みができない児童生徒が読み聞かせ動画で絵本のお話に親しんだことから、実際の書籍を手に取るなど、本への興味につなげることができたり、興味の広がりが見られたりした。

・公共図書館を授業で利用したことにより、家庭での公共図書館の利用につながった。

・学校図書館だけではなく「公共図書館」があるということを知るきっかけを作ることができた。

・読書旬間により、「普段は手に取らない本に興味を持った」という声が多く聞かれ、担任や級外による読み聞かせや、本の紹介で児童生徒の興味を広げるきっかけとなった。

・利用しやすさを改めて考え直し、読書バリアフリーを一歩進めることができた。

・授業や読み聞かせでたくさんの本に触れることにより、少しずつではあるが確実に興味の幅に広がりが見られ、本を楽しむことができるようになっている。特別支援学校での読書活動の大切さを実感できる実践となった。

（２）課題

・音声動画化はまだ一般的ではなく蔵書としての扱い方など、校内外で相談していく余地がある。

・図書館教育部で作成した読み聞かせ動画が多いので、他の教職員の読み聞かせ動画を増やしたい。動画作成方法を共有し、授業で使った読み聞かせ動画を「にしとく電子図書館」に格納していけるよう働きかけていく。

・読書バリアフリーについて学校全体で考え、誰にとっても使いやすい図書館となるよう整備を進めていきたい。